

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.142

多摩風土記（淡島神社）

町田市根岸町の鎮守は淡島神社で、祭神は葉の神でもある少彦名命。淡島神社は、浅草寺の淡島堂を除き、都内でこだけ。由来は不明だが、江戸時代の根岸は『新編武蔵風土記稿』に「春は原野に生ずる所の柴胡を採つて」とあり、柴胡は解熱に有効な薬草であったので、葉の神を祀ったのだろうか。大阪の葉の町道修町には少彦名神社がある。（健介）



俳句になにができるか

— 現代俳句協会設立と

イデオロギーの克服

日野 百草

昭和二十二年九月、現代俳句協会は結成された。その翌月、ひとりの男が餓死した。

その男は裁判官で山口良忠という。ヤミ米を拒否して配給食のみで暮らし、その配給すらままならず三十三歳で餓死した。ヤミ米を買い求めて逮捕された人々を裁く自分がヤミ米を食べられるかと、裁判官としての矜持を守り続けた果ての餓死だった。その前年には幣原喜重郎内閣が「餓死者一千万」とアメリカに訴えている。アメリカは日本国内における反米と赤化運動の高まりを恐れ、いわゆる「ララ物資」による援助を開始した。アニメーション映画『火垂るの墓』は主人公の清太少年が

駅で浮浪児として野垂れ死ぬところから始まるが、あれが現実だった。

現代俳句協会は、そのような「飢えるか、死ぬか」の時代に誕生した。俳句どころでない時代に生まれた。まずその点を踏まえないと現代俳句協会は語り得ない。創立メンバーの志は高くとも「飢えるか、死ぬか」の世間一般からすれば腹の足しにもならない「俳句になにができるか」扱いである。それでも俳句で人間を、社会を詠まなければならぬと決意した人々である。私たちもまた、その背中に続いている。

飢えて皆親しや野分遠くより 西東 三鬼

野犬の目飢えて爛々人も亦 楠本 憲吉

蚤鼠詩性拳銃餓死議事堂 鈴木六林男

太平洋戦争の日本人死者は三百万人と言われている。実際は間接的な餓死や病死、獄中死などを含めそれより多いだろう。日本人のほとんどは身近な人を亡くしていたと言ってもいい。現代俳句協会が結成された年は、そんな三百万人超の死者の遺族や関係者が飢えていた時代、でもある。しかし現代俳句協

会に関わった俳人たちは（のちに去った者も含め）、そのような時代に俳句を詠み、第二芸術論を筆頭とする「俳句にながめるか」という無用の長物としての評価に真つ向から対峙するために「社会性」の声を上げた。

ここまでは、既知の通りである。しかし、現代俳句協会の設立にはもうひとつの理由があった。

一 現代俳句のイデオロギー対立

それは俳句におけるイデオロギーの扱いと、その克服である。冷戦と高度成長、そしてバブル景気とその崩壊を経たいま、俳壇全体で「まるで無かったように」してしまつた感のあるイデオロギー問題、冷戦の終結とソヴィエトの崩壊もそれに拍車をかけたのかもしれない。時代の流れとしか言いようがないが、このイデオロギーによる対立と克服もまた、現代俳句協会の礎であつたことは事実である。

現代俳句協会が、新俳句人連盟という組織から脱退した俳人によって結成された史実は周知の事実であるが、その対立と決別は俳句団体として日本民主主義文化連盟（以下、文化連盟）の傘下になるか、つまるところ「文化連盟の世話になるか」という点にあった。文化連盟は旧コミンテルン、ソヴィエトの影響下であり、その影響力拡大のため俳壇にも接近してきた。戦争に負け、戦犯憎しと餓死怖しの日本では左傾化が進んでいた。いまでは笑い話になつてしまふが、一部では「俳句で共産主義革命」が本気で信じられていた。また戦後まもなくの混乱期、俳人のほとんどが貧乏で家族を食わせるのもままならず、

本業で精一杯だつた。つまるところ、組織を維持する金がない。

かたくなに飯はみ妻をなかつたる 佐藤 鬼房

日の溜りより配給を告げにゆく 古沢 太穂

貧せて月のまわりへ胡桃降れ 赤尾 兜子

イデオロギーは極左俳人らによる「俳壇戦犯裁判私案」にまで至つた。かつて大政翼賛会の下部組織である日本文学報国会俳句部会に参加、戦争に協力した俳人を洗い出し、これを「俳壇の害虫」として裁くという「人民裁判ごっこ」は秋元不死男、三谷昭、平畑静塔ら「新興俳句弾圧事件」の被害者ですら拒絶するような代物だつた。

「戦時に犯した行為を頬かむりして、再び今の時流に便乗し、民主主義や自由主義の仮面をかぶつて、これからの俳壇に横行せんとしてゐる人が見受けられる。見えすいた論で過去の醜行を弁解したり、または、子供だましの理屈で、誤魔化さうとしてゐるのがある。これこそ、これからの俳壇の害虫である」

作成者は湊楊一郎、この裁判の中心となつたのは特高により逮捕されて病で亡くなつた「土上」の嶋田青峰の弟子たちであつた。師を殺した大日本帝国は崩壊したが、それに加担した俳人がのうのと暮らしている、とくに「ホトトギス」系の伝統俳句の俳人たちを「戦争協力者」「反動」として排撃した。極左化した一部の俳人、とくに旧「土上」メンバーと他の俳人の溝は深まつた。石田波郷や西東三鬼、平畑静塔らは元「馬酔木」である。俳句の方向性で袂は分かつても古巣を戦犯に挙げられては堪らない。また秋元不死男は、

「あの頃、日本人が戦争に勝たねばならぬと思つたのは、日

本人として誰でも持つていた感情であつたし、その感情を俳句にすることは正しいことであつた」

と書いている。過去の行為を目的外利用であげつらい、主義主張に利用する行為を近年は「キャンセルカルチャー」と呼ぶが、そうした行為を不死男は否定した。不死男も元「土上」同人であつたが、彼は極左俳人と一線を画した。

二 イデオロギーの峻別

こうして文化連盟の傘下になることや俳壇戦犯裁判の開廷への反発、極左化する俳人と袂を分かつ形で現代俳句協会が生まれるわけだが、その極左俳人の一派を「左翼小児病」と切り捨て、戦犯とされた中村草田男を評論『草田男の犬』で擁護した新人が赤城さかえである。

壮行や深雪に犬のみ腰をおとし 中村草田男

この句を「戦争感激」の句とした一派に対し、さかえは「戦争懷疑」の句であるとした。この、いわゆる「草田男の大論争」は一年以上も続き、高屋窓秋や志摩芳次郎らもさかえを擁護、最後は追い詰められた一派の俳壇引退や逃亡による終結をみた。もちろんさかえはそのような悲しい結果を望んではいなかった。ただ俳句を文学として守りたかっただけである。

人を責めて来し冬帽を卓におく 赤城さかえ

この「草田男の犬」論争を通して主張したさかえの論は、現代俳句協会の精神にも繋がっている。「写生主義から近代リアリズムへ成長した上の写実的象徴」「子規の革新の精神」「我々が明日の文芸に要請するところのリアリズムとロマンチズム

との統一の上に成長する新しいリアリズム」というさかえの論はそっくり現代俳句協会の作句精神に継承され、金子兜太、佐藤鬼房、古沢太穂らに影響を与えている。とくに兜太は「リアリズムを、素材主義と思想押し付け主義から峻別して、すぐれた俳句作品の形成に役立てようとした」（昭和五十六年・跋）と事あるごとに評価している。さかえは現代俳句協会に入り、のちに協会幹事を務めることとなる。

こうした先人らによるイデオロギーの峻別がなければ現代俳句協会は別のものとなつていただろう。現代俳句協会は文学としての俳句を志し、社会を、人間を詠み、まさしくその名の通り「現代」に至る。

終戦只中の先人らとは比べようもないが、私たちも未曾有の新型コロナウイルスという疫病に苛まれて二年余、ついにはソヴィエトの亡霊、プーチンによるロシアのウクライナ侵略という暴挙を目の当たりにしている。遠いユーラシアの話ではなく、プーチンの手には二〇二一年一月時点で六千発以上の核のボタンが握られている。

幾多の困難の中、人間と社会に対して「俳句に何ができるか」を探求し続けた先人たちの苦闘を振り返ることは、決してキャンセルカルチャーでもなければ恥ずべき過去でもない。むしろ「俳句」という文学を愛するがゆえの史実と誇りうるべきと思う。

現代俳句協会結成から今年で七十五年目、今度は私たちに「俳句に何ができるか」が問われている。

※文中すべて現代俳句協会に関わりのある俳人とした。

あけぼの集

あと三つ足せば白寿の梅見酒 東久留米 青村 萌生
 手につつむ紅茶のぬくみ春浅し 国分寺 秋山ふみ子
 宇宙を視察か初風の降りて来ず多 摩 足立喜美子
 初夢の大気圏より決める着地小 平安達 昌代
 聴覚に届く気配を雪解水清 瀬 穴原 達治
 冬ぼうし子に諭されて領けり稲 城 新井 温子
 峡の田や木の実を乗せて薄氷八王子 荒川 勢津子
 水洩をたらしして神の目がくもる町 田 有坂 花野
 禁じられし遊びのごとくかげろえり 国分寺 安西 篤
 生まじめに生きし人生福は内足 立 飯田 和子
 車椅子畳む八十八夜かな 東久留米 飯田 玉記
 蟻穴を出づさて何を食べやうか多 摩 石川 春兎
 胎動を撫でて小声の福は内小 平 石橋いろり
 今を生きる老木達の芽吹きかな練 馬 石原 俊彦
 玉砕とやデジャヴではない悲しみ八王子 市川 春蘭
 梅真白風の尖りし荒れ畑青 梅 一ノ瀬順子
 襟卷す失楽園の出口にて狛 江 伊東 類
 如月や猫の薄目がまた閉ぢて町 田 稲吉 豊

ピカソの画部屋はキュビスム窓うらら町 田 今田 述
 囀のなかを芭蕉と曾良の旅町 田 宇賀いせを
 愛し合っても鈴蘭のデイスタンス 武蔵野 内田 牧人
 春寒し夫亡き世を生くるとは 武蔵野 江中 真弓
 ウクライナ羽根を生やすに息が足りない府 中 大井 恒行
 校舎からシンバル響く蝌蚪の紐日 野 大槻 正茂
 綿虫の声なき声の乱舞する立 川 大友 恭子
 ふるさとに時計がなくて青き踏む川 崎 大西 恵
 土掘レバ眠ルモノ有り凍テ返ル三 鷹 大森 敦夫
 着ぶくれの二人の手と手整形科昭 島 岡崎たかね
 雪の夜の団欒いずこスマホかな 武蔵野 岡崎 万寿
 ほつぺたもベルトもゆるむ桜餅 小金井 岡本 久一
 ニン月を逃げたる者やシヨパン弾く三 鷹 小川 葉子
 大寒の大地踏みたきツウ・ビート飯 塚 奥野 亜美
 海白し御殿夢想す鯨群来昭 島 尾関 英正
 鯨尺捨てず使わず木の芽風稲 城 門野ミキ子
 振り向いたキリンの首にある春愁 西東京 金谷サダ子
 前を行く吾を追ひかけて息白し日 野 亀津ひのとり

あけぼの集

立春やリユック何処へしまつたか 西東京河 順子
 云い回す文あやある言葉暖かしさいたま 河井 時子
 辿りついた齡なのに戦か二月尽立 川川島 一夫
 現代の喪失感や鳥帰る大 田川名つぎお
 慇懃いんぎん無礼の一世貫き二月逝く調 布菅 さだを
 強風に耐えて色増す冬椿清 瀬神崎 幸子
 ふらここの鉄の匂いと居てひとり小 平城内 明子
 立前と本音のはざま薄氷武蔵野高坂 栄子
 駆け登り又駆け降りてくる猫の恋 西東京 幸村 睦子
 刑終えた人とつまづく桜道府 中小林 育子
 日曜日蝶が目覚める兵が死ぬ町 田小山 健介
 巨樹の根の毛細根の蠢きよ立 川今野 修三
 日脚伸ぶ点字のグリム童話集多 摩 齊田 仁
 面倒見良くて無口で鰻大根昭 島坂本 空
 みちのくの氷柱つらつら乱反射 東久留米 佐々木克子
 薄氷の解けて自由な水となり府 中笹木 弘
 離れ立つ間合ひに慣れて鬼は外調 布佐藤 茉
 風花やゆつくり知らぬ町になる昭 島佐藤 光子

老梅は祖母の姿や母のかげ八王子柴 れいこ
 シリウスの光極まる大寒波杉 並島 彩可
 般若の根付かばんに御守りに国分寺島田 澄子
 ウクライナの春草木深しかな足 利清水 弘一
 すっぱりと関八州や春の雪小 平下田 峰雄
 捨て切れぬもののお身に桜咲く 西東京 白尾 幸子
 大福のうすぎぬ 赤く春苺調 布白戸 麻奈
 ありつたけの卵を茹でる春寒し 世田谷 鈴木 浮葉
 代替わり住む人知らず梅の花立 川鈴木かずえ
 遺書書かず断捨離もせず藪椿小 平鈴木 寿江
 ステイホームコロナは自由冬の空 小金井 鈴木 佑子
 また春をつぶす北の発狂獣町 田栖村 舞
 山眠る風のまにまに根無し雲板 橋諏訪部典子
 読初は本を重ねて少しづつ 東村山 瀬尾 恵澄
 硬券の秩父鉄道春の野ゆく小 平関 梓
 本棚のきつねと眼の合う雛の夜調 布芹沢 愛子
 蝉時雨には十匹ほど足りぬ 武蔵野 高野 公一
 木枯しや向きを変へずに海の石 西東京 高原 桐

あけぼの集

立春や南国土佐に春野町清 瀬谷村 鯛夢
 春光にふれてビーズのキーホルダー 国分寺 玉井 豊
 園児あり車中の春眠駅通過 稲 城 玉木 康博
 日脚伸ぶ十三階にない 昼日 野 玉木 祐
 蝶のワルツ女性指揮者は舞ひながら 三 鷹 田山 光起
 寒夕焼笑つて別れグータッチ 三 鷹 中條 千枝
 新宿の雑踏蹴散らし凍土に楔 八王子 辻 升人
 宇宙へと大きなくしゃみ花粉症 八王子 都筑 遊
 いずかたも水に音あり寒の明け 東村山 寺尾 令子
 さくらちるさくらちる鎮痛剤をもつと 立 川 遠山 陽子
 大音響後の静寂雪の小屋 西東京 戸川 晟
 山鳩に名前をつけて春を待つ 杉 並 飛永 百合子
 休むたび肝臓に春沁みわたる 清 瀬 永井 潮
 風花や幽界通信かも知れぬ 国分寺 中川 肇
 初旅や倒木多き 峡の 宿町 田 長澤 義雄
 眠れない春満月が重すぎて 小 平 中條 啓子
 孤独てふ自由の翼 風光る 西東京 中田とも子
 畦道の轍のがれて犬ふぐり 座 間 長野 保代

千円ガチャこんな処に花の駅 国 立 中野 淑子
 花束のゆさゆさ膝の紙袋 府 中 中矢 温
 戦争の足音 春節の 五輪 武蔵野 夏目 重美
 初花やこれより時の動き出し 町 田 成戸 寿彦
 風とほす母の形見の春衣 世田谷 西前 千恵
 久女忌の荒野ゆくりと歩みをり 昭 島 西村 智治
 雲の影新聞に走る日向ぼこ 多 摩 拔山 裕子
 逆立ちし底の餌をとる 鴨の尻 三 鷹 根岸 敏三
 紅梅や小さき家を売る 話 三 鷹 根岸 操
 立春やいつもの野道旅として 小 平 野口 佐稔
 凍星や櫛木立に夜のしじま 八王子 野澤 勝美
 龍の玉来世も妻と言われたき 青 梅 萩原 芙沙
 ひばり鳴くこの世の終わりではないと 武蔵野 蓮見 順子
 テレワーク都忘れを活けてから 武蔵野 蓮見 徳郎
 すみれ踏む人間を踏む 戦見つむ 日 野 日野 百草
 解散の肘タッチして山笑う 多 摩 平山 道子
 張る意地に寂しさ透けり 久女の忌 調 布 藤原はる美
 老懶や云はるゝまゝに更衣 練 馬 淵田 芥門

あけぼの集

老梅に米粒ほどの芽が一つ八王子冬木 喬
 啓蟄のゆつくりまわす万華鏡羽 村堀部 節子
 片栗や明日また開く花たたむ羽 村堀部 嘉雄
 手の甲に夕日を受けて多喜二の忌国 立前田 弘
 つまづいて親しくなった仏の座国 立前田 光枝
 雪のせて久女句碑が今日も立つ木更津松本 まり
 春宵の賑わい黄泉の晩餐会八王子松元 峯子
 恍惚のピアニストから陽焰が東久留米三池 泉
 歌姫の親子に別れ雪積もる東久留米三池しみず
 孫頼む合格祈願春めく日東久留米三浦 禎三
 俳諧は惚け防止ですつくしんぼ小金井三浦 土火
 雪しまく訛はパンの柔らかかさ世田谷三浦 文子
 好きなこと言って好き嫌い桃の花町 田三木 冬子
 草の餅土手の匂ひも母の背も国分寺水落 清子
 田一枚鋤込みを待つ蓮華草三 鷹水野 星間
 春立つや崖はけの空から妻の声日 野満田 光生
 反戦のデモやロシアの凍てし春八王子みどり
 天辺の一個は月となる榎植昭 鳥宮腰 秀子
 番号札5番でお待ちの方春です調 布宮崎 斗士

ジエンダーや少年そつと初鏡国分寺武藤 幹
 麦秋や空を恋う歌歌う人小金井村井 一枝
 春浅し待ちの姿勢の砂時計熱 海望月 哲土
 文明の夜の部分に梅香る三 鷹守谷 茂泰
 菜の花の黄にうばわれている時間町 田山崎せつ子
 背中まで無口な夫と花野中東村山山崎美紗緒
 かげろうのような出句を二十年府 中山本 徳子
 古民家の更地の太き紅椿八王子山本ひまわり
 立春の水溜りの空飛び越える多 摩山本みつし
 散骨を望みし父の春の海調 布豊 宣光
 笑い過ぎの涙よ鷹は鳩と化し稲 城好井 由江
 誰よりも人遠き日や冬薔薇三 鷹吉川 真実
 押し入れはタイムトンネル煤籠府 中吉澤 利枝
 曙の 儂い 時間 山 笑う東大和吉田雄飛子
 浅蜷汁座の文学の危機迫る東久留米 吉平たもつ
 雛あられ手に乗るほどの幸でよい国 立吉村春風子
 汚染水飲めよ為政者三月来日 野依田しず子
 窓越しに猫と見てゐる春の雪立 川米澤 久子
 兄貴より次男は気楽囀りぬ青 梅渡部 洋一

青村 萌生

エンディングノートは白紙年惜しむ

成戸 寿彦

老齢になると誰でもいつかエンディングノートを書き始めますが、戸惑うのが人情です。そのデリケートな感情を、当面は白紙のまま二句一章にし、下五を「年惜しむ」という適切な季語で締め括っている点、読み手の共感を呼んでいるのです。

安達 昌代

夜は石に還る石佛萩の花

山崎美紗緒

路傍に据えられた、あるいは岩肌に刻まれて風雨に丸みを帯びた石仏たちである。日のあるうちは世の憂いを一身に受け止め、暮れて後は森羅万象のひとつとなって、夜の深きへ溶けてゆく、寓話性に富んだ静かな佇まいが萩の花と響き合う。

有坂 花野

冬の川比処に生きとし生けるもの

大森 敦夫

過酷な状況に置かれても生物は生き延びる努力、変態、転移を繰り返す。水の涸れた川に潜む生物に目を凝らす温かい視線が人間の驕りを問う。いや叱咤激励とも。細まった流れ、雪に覆われ、凍った川底の石よ落葉よ、生き物たちよ。

宇賀いせを

晩年の閑居何より日向ぼこ

青村 萌生

羨ましい限りの句である。冬日の燦々たる縁側で、日向ぼこしている姿がありありと窺える。作者が精一杯生き切った姿がこの句に伺える。永かった人生行路の「一時」を「一処」を太陽の温みに育てられながら何と幸せなことだろう。

江中 真弓

共倒れしそうで夫婦さくらんぼ

高野 公一

危うさを抱えつつも、支え合って過ごすご夫婦の日常が彷彿する。二つ繋がってつやつや光っている「さくらんぼ」の、幸せそうな明るさが新鮮だ。共倒れしそうで「ではない。精一杯、共に生きていく姿がほのぼのと胸にあたたかい。

大西 恵

無言といういちばんの嘘冬牡丹

宮崎 斗士

選挙で投票しない（無言）というのは、自分の意見を言わないと同じ。つまり、それが「いちばんの嘘」。やはり正直になつた方がいい。冬牡丹が被っている蓑帽子が、周りの音（声）を聞かないようにしている人の姿と重なりました。

岡崎たかね

ジェンダーを学ぶ七十路夜長し

吉平たもつ

日本のジェンダー平等度は世界121位。何がいけないのか。「元始、女性は太陽であった」という。今「女性蔑視」を検索すると「ジャパン」と出るとか。70代80代は慌てている。カタカナ語だけでは本質理解はむずかしい。「性差」という訳語もあるが。

岡崎 万寿

死せるかと思えて蟠螂髭立つる

足立喜美子

年の所為か枯蟠螂への興味が濃くなってきた。ユーモアがあり老いの一徹への共感だろう。この句は枯れ色というより「髭立つる」一点に着目。それが自然体でいて老醜をさらう金子兜太晩年の美意識と共通していて面白い。これも「生きものの感覚」か。

小川 葉子

ラベルにはごまめの産地風ぎの海

玉木 祐

『ボレロ』と言えばラヴェル。タン・タタ・タ・タの打音に護られたメロディーの繰り返しが大きくなる。砂漠を隊商が近づいて来る。ところが、掲句ではごまめの産地である海だ。モーリス・ラヴェルではなく商品ラベルだと無粋などは言うまい。

川名つぎお

冬積水の青さにエピソード

前田 弘

諷詠の世界を鮮明に表現に換えた時空。荒寥とした河川敷の光景を眼に浴びた瞬間「青さにエピソード」の記憶が蘇生した。新緑の「青さ」の空間が心に沁みる。瑞瑞しい初夏の川原の家族、仲間や一人の散策など俗世の遊びとも自在な場とも表白へ。

菅 さだを

極楽と母の口ぐせ柚子湯かな

鈴木 佑子

ふと耳許で聞き慣れたつぶやきを聞いた気がしたが、それは先年九八才の夭寿を全うした妻の実母の声に紛れもなく極楽極楽と。義母も特に温泉好きで、それが柚子湯ともなれば尚更で、一刻昔の思い出にひたらせていただけた幸せを作者に感謝したい。

神崎 幸子

晩学のスマホほろほろ枯木立

平山 道子

年配者がスマホを使いこなすのは大変です。取説を読んだり人から教わったりして少しずつ身につけていくのですがまさに晩学。ほろほろでもおろおろでもなく、ゆつくりとマイペースで一目目ずつクリアしているのでしょうか。頑張ってください。

幸村 睦子

肩ラインコロナ下の冬みんな美人

玉木 康博

たしかに、車中にて、向かいの席に並んだ女子達のアイメイクが上手くてみんな美人に見えます。
……………

マスクをはがしてみたい衝動にかられた、いじわるのおばあさんでした。

芥田 仁

片面にボエジーのあり冬の壁

安西 篤

冬の壁という、ある意味で無機質なものに詩を感じた心に賛同した。なまなましささえも感じた。「片面に」という表現は作者の感性のうごめきだろうか。

定型という骨法を守りながらこれが出来るのが俳句というものだろうと思う。

坂本 空

引退の選手の背中冬日向

三池しみず

きつと周囲の人達から引退を惜しまれるような選手なのだろう。ファンからの温かい応援や支えてきたスタッフの思い、これから選手としての活躍が見られなくなる寂しさのようなものを、季語の冬日向から想像した。

櫻本 愚草

冬支度押し入れに陽をたたみ込む

柴 れいこ

冬支度を忘れ「戦争が廊下の奥に立つてゐた」と、さる俳人が詠まれた。

日常生活の中で押し入れに陽を叩きこむと同じように、忘れずに戦争なぞ立たし忍みび難きを忍ばなければならないことになる。

笹木 弘

見えぬ手に頭叩かれ三橋忌

遠山 陽子

三橋敏雄氏の忌日は十二月一日で私の誕生日の前日。この句を見て、敏雄さんとの思い出が蘇ると共に、叱咤激励されているように思えた。作者は三橋敏雄氏に師事され、多くのことを学び、このようなことになったのだろう。懐かしく思った。

佐藤 光子

見えぬ手に頭叩かれ三橋忌

遠山 陽子

「私、敏雄の娘です」八王子四中中の保護者会の後、涼子さんから挨拶を受けた。平成十三年十月二十七日逝去一か月前の句会で初めてお会いし、握手をした。大きな掌だ。「俳句」追悼号の短冊に染筆されている写真は、その日私が撮ったものである。

柴 れいこ

元気ならどうにかなるさしやぼん玉

飯田 玉記

数日前義兄の突然の死に直面し、一瞬に生から死へという人間のはかなさを味わった。一生にはさまざまな苦勞、思いのままにならないことが多い。だがよくよ思い煩っても仕方がない。人生プラス志向で「しやぼん玉」が希望につなげてくれた。

白戸 麻奈

大寒や砂漠のキツネ耳ばかり

芹沢 愛子

「砂漠のキツネ」と呼ばれたロンメル將軍を思い出しました。ドイツの軍人で第二次大戦中北アフリカの英軍をさんざん悩ませて最後はヒトラー暗殺計画に連座し自殺させられた人である。今はフエネックにでもなつて砂漠の風に吹かれていて欲しい。

鈴木 浮葉

糞虫やありのままとは超難問

小林 育子

デイズニーの「アナと雪の女王」主題歌レット・イット・ゴー、ありのままに、大ヒットしました。しかし作者さんのおっしゃる通り、ありのままに生きるって？と首を傾げます。哲学として、揺らぎながら、自ら突き詰めるしかないか、ねえ、糞虫くん。

鈴木 寿江

元気ならどうにかなるさしやぼん玉

飯田 玉記

コロナ禍も中々収束せず、経済もま、ならず、又戦争と暗い話ばかりです。しやぼん玉の様にちよつと触れば破裂しそうな世の中。高齢者には元気さえあればどうにかなる様な気がします。身体に気を付け前向きに生きていきましょう。

諏訪部典子

呵呵大笑の白寿の尼の白障子

石橋いろり

「呵呵大笑の白寿の尼」は寂聴尼のことと思います。「一日十回心から笑つてくたさい。」と笑いを勧め居られた寂聴尼の顔が浮んできます。きつと、彼の世でも大笑いして居られることでしょうか。季語の「白障子」がよく効いています。

谷村 綱夢

ジェンダーを学ぶ七十路夜長し

吉平たもつ

エラソーな物言いの例の元都知事が「日本男児として」とよく言つてたが、そういうまさに「ジェンダー」な「男らしさ」が嫌だな。鬱陶しい暑さが終わった後の、この夜気がいいと感じたときの一句は人生の一粒塚と季感の配合が実に今風で、結構。

玉木 祐

片面にポエジーのあり冬の壁

安西 篤

壁に詩を感じているとは、壁はビルの側面と思う。冬と有ることで南面の日当たりを想像する。無機質のビルの片面に詩を感じている作者の立ち位置は、向かいのこれもビル、ビルからビルの側面の壁の景を詠う。太陽光線の美しい捉え方。

田山 光起

魂呼のごと山を呼ぶ冬はじめ

亀津ひのとり

「魂呼び」という古風な用語に触発されて、映画「ラヴレター」の一シーンを思い出した。主演の中山美穂が山で遭難死した恋人に「お元気ですかー！」と必死に呼びかける姿が切なかつた。俳句には意識下の思いを呼び覚ます、ふしぎな力がある。

辻 升人

冬の川此処に生きとし生けるもの

大森 敦夫

「川」は生きている昼も闇の夜も、夏も冬も、雨の日も風の日も滔滔と流れ止まない。時に人を癒し、勇気づける、そんな川が作者は好きなのだろう。此処に佇み、勇気づけられ、よし俺も負けてたまるか生きるといふ意気込みが感じられる…共感。

徳山 優子

カタカナの崩れるように霜を踏む

蓮見 徳郎

霜柱がきれいに縦に並んでいると、そのトゲトゲ感がカタカナの様に見えなくもない。

子供の頃、霜柱を見つけては踏んでいくその感触が、カタカナでよく表現されると思う。

長澤 義雄

元旦や太平洋の日の出待つ

宇賀いせを

初日の出を拝むため、暗いうちから海岸に出かけ元旦を迎えるという景に清新な気分が漲っている。太平洋の日の出を待つ臨場感に新年の抱負や一年の計など、作者の姿勢もしっかり伝わってくる。大きな景を平明にして淡々とした詠み方は味わい深い。

中條 啓子

大根を干して昭和がやわらかい

宮澤 雅子

家の軒に大根が干してある。山里かな？ ゆらゆらと柔らかい夕日が大根に当たる。昭和を思い浮かべる風景。「昭和がやわらかい」のフレーズに惚れ惚れ。大根の甘い香りが口腔・鼻腔に広がり、郷愁が胸いっぱいになり満ちるようだ。

中田とも子

着ぶくれて後回しにす死支度

藤原はる美

人生の最終楽章を迎える高齢者にとつて正に、目前の一大事「死支度」。常に頭の一角を占めているにもかかわらず、体の方は意に反するほど動かかないのは、私だけではなかった。何故か、ほっとしています。「着ぶくれて」絶妙です！

長野 保代

雲拾い雲捨ててゆく冬の月

永井 潮

情景が上五・中七の措辞によつてしっかりと見えてくる。私は断捨離の心かなと思いました。下五の季語の冬の月が照らす、それだけの景でありながら冬の月の冴えた冷たさが体感として伝わって鋭い句と思えました。

成戸 寿彦

魂呼のごと山を呼ぶ冬はじめ

亀津ひのとり

亡くなられた方の魂を呼び戻す魂呼のごとくに、山に呼びかけたくなることがある。身近な方がなくなつた時や人生の岐路に挫折した時などが、冬に入って空気が凜と引き締まった時期には、返ってくる澄んだ祈りに癒されたものだ。と、同感した一句。

西村 智治

空蟬はたましいの柩マイナンバー

三木 冬子

この句を読んで、ふと「名刺入れ」を思いうかべた。そういえば、空蟬を入れるのに、ちょうどよい大きさかも知れぬ。マイナンバーも、名刺も、空蟬も、ある意味、柩のようなものかも知れぬ。この作者の、この発見、面白い、と、思う。

萩原 美沙

凍て滝に細き一水意を通す

吉村春風子

厳しい寒さの中、芸術的美しさを醸し出している凍て滝に、五感を研ぎ澄ませながら向き合っている。一面に張り詰めた氷に、細くも力強い一筋の流れに気づいた作者。私も何かを教えられたような秀句に惹かれました。心の糧にしてゆきたいと思えます。

蓮見 順子

小鳥来るいつもの柿の木伐りました

野口 佐稔

「えっ、えっ早く言つてよ」小鳥のとまどいの声が聞こえてきそうです。何げない表現で思わず微笑んでしまう情景句。私の家に柿の木はありませんが、餌場を作っているので色々な小鳥が来てくれます。窓からそつと覗いて楽しんでみます。

遠見 徳郎

引退の選手の背中冬日向

三池しみず

野球やサッカーで活躍したベテラン選手が、引退試合を終えて挨拶のグラウンドに立つ。長年背中に背負っていた背番号が冬の目を浴びている。長い間頑張ったね、ご苦労さんと言われていろいろ。スポーツの哀愴を映し出している。

平山 道子

大根を干して昭和がやわらかい

宮澤 雅子

昔はよく沢庵を手作りしたものでした。真冬の晴れた日に大根を四、五日風通しの良い所に吊し、乾燥した大根は少しやわらかく、太陽の恵みが掌に温かでした。もう遠い日となった作者の、昭和への諸々の回顧、哀感が心に響く佳句です。

藤原はる美

見えぬ手に頭叩かれ三橋忌

遠山 陽子

所属結社の句会に戦争を知らない若者たちが増えて来た。彼等は知り得た僅かの史実に基に、戦争という重いテーマをいとも安直にさらりと詠み流す。無数の戦争俳句を作り、日本のあり方を問いつけた三橋敏雄の作句姿勢を忘れてはならない。

淵田 芥門

もう山へいかぬ背負子や冬に入る

小山 健介

長きに亙る『多摩風土記』の筆者、昔時、今日の多摩を知り尽くす。人生いくつかの節目があるが、いま、冬めく里山を悠然として見ると、遙か昔の原風景に回顧することさまじま。背負子を斡旋し、充実した老境を、巧みに暗喩した一句である。

冬木 喬

割烹着離さず勤労感謝の日

荒川勢津子

昭和のお母さんを目の当たりにしたような句。どんな祝日であつても常に変わらぬ働く姿が「割烹着離さず」だ。母への慈しみが深い。勤労感謝の日は「勤労を尊び生産を祝い感謝し合う日」(要約)とある。崇高な理念ではあるが――。

堀部 嘉雄

もう山へいかぬ背負子や冬に入る

小山 健介

むかしは、農家に必ず大人用から子供用まで揃えてあつた背負子である。山から枯木の背負い出しや農産物の運搬には無くてはならない道具であつた。作者も戦後お世話になつた背負子であろう、しみじみとした味わいのある句。季語の斡旋が光る。

三池しみず

夫のなき部屋の広さや白障子

松元 峯子

さみしさを部屋の広さと白障子で表現している句です。御主人と過ごした楽しかった生活を思うとおつらいことでしょう。どうしようもないさみしさを経験されている作者ですが、この句から愛情の深い御夫婦だったことが感じられます。

水落 清子

大根を干して昭和がやわらかい

宮澤 雅子

作者の穏やかな日常が見えてくる句で惹かれます。干しては、ご自身も作業をされたのでしよう。下がつた大根の向うに青空が広がる昭和を見た作者、激動の時代であつた昭和も懐かしいだけのものではない。柔らかないと感じる心の作者に私も同感です。

武藤 幹

無言といひちばんの嘘冬牡丹

宮崎 斗士

「無言」であることはマッサラか中立か？否である。「無言」である事は、時の権力、その場の大勢への大いなる追認に他ならない。「いちばんの嘘」には作者の抱く世界状況への危機感が鮮明だ。季語冬牡丹との取り合わせも本質を突いた皮肉と解した。

村井 一枝

じんじんと傷む天地や雁の列

根岸 操

昨今の地球を思うと「じんじん」が胸を打ちます。世界中での自然破壊の現状。これを止めなければの声もあるが利害の絡みもあるのか大きな流れとはならない。地球は人類だけのものでなく数多動物との共存こそが本来のもの。地球を大切にと思っ

望月 哲士

共倒れしそいで夫婦さくらんぼ

高野 公一

高齢の夫婦は相手が老いて来たなと感じ、それぞれサボートしたいと思うのだが、思うようにはいかず改めて自身の老いに気が付かされ、共に老いて共倒れという不安感が過ぎる。若い頃はさくらんぼのように生き生きとしていたのという思いが切ない。

守谷 茂泰

寒椿この終章を急がねば

冬木 喬

作者の急ごうとしている「終章」とは何だろう。読みかけの本のことか、やりかけた大事な仕事か、ひよっとすると人生の晩年を意識した句なのかもしれない。寒椿の配合によって深い響きに加わり、前向きな読後感の作品になっていると思う。

吉平たもつ

雲拾い雲捨ててゆく冬の月

永井 潮

この月は満月ではないだろう。三日月で風が強い寒い夜の情景が目につかぶ。雲はちぎれ雲（積雲）で月を覆い、また通過していくのだ。あたかも月が雲を仲間のように選んでいるかのようで、メルヘンチックである。

依田しず子

三隣亡という日渋谷は夕しぐれ

好井 由江

大安や仏滅を気に掛ける事はままあるが、三隣亡までは拘らない事が多い。長屋落語にはあつたかも。真ん中で切れる二文形式で相互に直接の因果はないと思うが、一気に読むと互いに作用し合い、暗喩的な味が深まる。渋谷にひとり棒立ちの作者か。

あけぼの便り

○三浦土火様、前号で拙句を取り上げて頂き有難うございます。コロナ禍ゆえにこそ小さな風や草のゆらぎに心を奪われる日々です。繊細で丁寧な鑑賞を賜り嬉しかったです。

○秋山ふみ子様、抜山裕子様、拙句「アス

ファルト時計じかけの油蟬」をご鑑賞いただき有難うございます。とても嬉しかったです。(石橋いろり)

○玉木康博様、前号で拙句を鑑賞して頂きありがとうございます。春の訪れを待っているこの頃です。散策の野辺には、イヌフグリやホトケノザが小さな花を付けています。(一ノ瀬順子)

○稲吉豊様に拙句「松茸やしめじのような妻と居て」を選句頂き有難うございます。「多摩のあけぼの」への投句は身構えなく出句できる雰囲気があり楽しいです。毎号編集発行のご苦勞をおねがいし感謝いたしております。(内田牧人)

○立春を過ぎてから徐々に春の兆しを感じられるようになってきました。日が長くなったと気づくと嬉しくなります。お元氣でお過ごしください。(大森敦夫)

○幼い頃、俄か百姓の母と共に麦踏みをした記憶が蘇りました。楽しいことでした。「折角芽生えた麦の芽を何故踏みつけるのか」と問いました。(奥野亜美)

○コロナ禍三年目の早春、さすがに心身うつうつ。そろそろ冬眠から覚めた熊のごとくうろついて身心を解放しよう、と思案中です。ワクチン三回目も終わったことだし。編集の皆さまのご苦勞に感謝申

し上げます。(亀津ひのと)

○飛永百合子様、西前千恵様、前号で拙句を取り上げて下さり、また頑張るという気持ちになりました。本当にありがとうございます。(河井時子)

○これからの課題は俳句作者の晩年でしよう。(斌雄にならい)しだいに老いてゆく中で、俳句のこれからの暗示する作品を共に創りましょう。(川島一夫)

○諷詠のみなら俳句も楽だが、時代の複雑さの表面を撫でる句は今さら書けず。オミクロン禍が、デルタ禍の二の舞か果てが判らず。苦渋す。(川名つぎお)

○花粉症で鼻ばかりかんでいるこのごろ、「春寒しティッシュ二枚づつはがし」(幸村陸子)

○石原俊彦様、前号で私の句「涼風の余白に凭れ熟睡す」を取り上げてご鑑賞下さりありがとうございます。これからの励みになりました。風はまだ冷たいですが、白梅のほのかな香：そして蠟梅のやわらかな香に日々慰められつつコロナ禍を過ごしています。ふる里秋田はまだ雪の中です。(佐々木克子)

○前回はじめての投稿を大切に扱って下さってお礼を申し上げます。心新たに誌面をみると何と充実したお話を伺えるこ

とでしょうか。「小平靈園」のことも保存版になりました。皆様どうぞお大切に。(高原桐)

○「多摩のあけぼの」14号に私の句をとりあげて下さった大友恭子様、高野公一様、ありがとうございます。誌面を借りしてお礼申し上げます。私はこの二月で卒寿を迎えます。幸い元気でおり有

難い事と感謝の毎日です。自然体で頑張らずもう少し考えて暮らして行きます。高野公一様、「新潟出版文化賞」受賞お祝い申し上げます。(玉木祐)

○昨年末、椎骨の圧迫骨折と鎖骨骨折で、当初は息をしても苦しい日々でしたが、ようやく少しずつ痛みも和らいできました。ケガをしていると俳句も作る気がしません。早くよくなって、一線に復帰したいです。(田山光起)

○いよいよ待ちに待った春、コロナ禍を一日も早くやり過ごして、皆さんにお目もじ出来る日を楽しみにしております。(寺尾令子)

○長期にわたるコロナ禍の影響で閉じ籠りの生活が続いています。このような時期には、今までに感じてきたことや体験したことなどを思い出して句を作ることが多くなり、想像力の養成に役立っています。

す。こう思うと気の向くままにどこへでも旅することができます。(長澤義雄)

○厳しい寒さが続いておりますが皆様お元氣ですか。寒さと共に増えたオミクロン株ですので、暖かくなれば下火になるのでは：と勝手な予想を立てていますが甘いでしょうか。対面句会に出席出来るよう毎日歩いております。「多摩のあけぼ

の」は、一頁の多摩風土記から編集後記まで一字も漏らさずに読んでも負担にならないので楽しめます。(中田とも子)

○いつもお世話になっております。会報楽しんでしております。(長野保代)

○根岸操様、前号で拙句の鑑賞をしていただき、ありがとうございます。しばらくご無沙汰しておりますが、またお会いできますことを楽しみにしています。こうして鑑賞していただくと、自分の句が良くなったような気持ちになり不思議です。(夏目重美)

○オミクロン株、まだまだ収束しませんが、私第三回目の接種をあと少しと待っています。いつになったら俳句の会に出かけられるのでしょうか。一日も早いことを祈っています。(西前千恵)

○14号の発送も大森敦夫事務局長が一人で全部行っ下さった。一堂に集まっ

の作業はいつ許されるのだろうか。コロナ禍の収束を願うばかりです。(根岸操)

○門野ミキ子様、関梓様、「大いなる片陰」の拙句、おとりあげ下さりありがとうございます。ご載せました。「現代俳句」の列島春秋にも一句載せて頂いたこと見逃していません。三木冬子様、有難うございました。

二月末のいま、ロシアのウクライナ侵攻という考えてもみなかった事態が生じています。先の見えないコロナ感染といい、大変な時代に生きていると感じています。編集部の皆さんくれぐれもご自愛ください。(野口佐稔)

○河井時子様、私の気持ちをそのままに汲み取って下さりありがとうございます。寂しいを口に出せば崩れそうになるから意地を張って頑張っているみたいです。老後はまさに気力、気力で。(藤原はる美)

○編集部一同様に感謝。今日は節分。二月一日の旧正月の春節の日に雛軸に掛け替え、心新たにしました。オミクロン株に気をつけようと緒を締め直しました。今年はずいぶん良い年にいたしました。皆様もご自愛下さい。(松本まり)

○新型コロナウイルス、デルタ、オミクロンと続く中、役員の方々のお骨折れあり

がとうございます。今年もどうぞよろしくお願い致します。(宮腰秀子)

○修行と思ひ複数の句会に参加しています。が、コロナ禍の為もう丸三年ほとんどの句会が「通信句会」となっています。去年暮れ、年明けには久しぶりに集まって「生句会」を開きましよう！の連絡。しかし憎つくきオミクロン株の襲来で全てが延期に!!一日も早い顔と顔を突き合わせた「生の句会」を待ち望んでいます。(武藤幹)

○コロナ禍の終息が見えず、句会も思うように出来ず寂しい思いをしています。(山崎美紗緒)

○編集部の皆様にはお世話になっております。感謝いたしております。コロナ状況もまだまだ収まりそうもありません。どうぞくれぐれもご自愛のほどお祈り申し上げます。(好井由江)

○いつもお世話になりました。句会や吟行もできない状況が続いています。句会や俳句を心の糧として日々を過ごしていきたいと思えます。(吉川真実)

○コロナ禍の中、入院手術と重なります。何とか俳句だけは続けたいと思っております。(吉澤利枝)

○三月十一日が近づき、十一年目の被災者の方々、未だ不明の方々へ思いを新たにします。阪神淡路大震災と大きく違い、原発のために復興が順調に進まない事も胸に刻みたいと思います。(依田しず子)

○戸川晟様、拙句にあたたかい鑑賞をありがとうございます。好物は堅焼煎餅などど粹がっていますが入れ歯に負担をかけないよう小さく割ってなめるように食べています。三年になる逼塞生活の中で、チョット捏造?したり美化したりして家の中の俳句を愉しんでいます。一日も早く吟行に出かけられる日の来ることを待ち望んでいます。(米澤久子)

○私は昨年第13回石田波郷新人賞において大山雅由記念奨励賞をいただき、今年度弊大学の学生表彰を受けた。そしてその縁でこうして一句を寄せさせていたいただいている。私は大学生になってから学生俳句会や俳句賞の運営に関わったが、日々の句会を初めこういった大会や表彰式が毎年何事もなく開催される尊さは、本当に因りしえないものである。そしてそれは自分が運営側に回らないとなかなか見えてこないものであった。改めてここに感謝を記したい。(中矢 温)

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。(意見幹事担当)
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

★令和4年度定時総会 並びに陽春俳句会

令和4年4月9日(土) 武蔵野スイングホールで開催されました。詳細は次号で報告します

★初夏の吟行会

日時 令和4年6月11日(土)
集合 JR武蔵小金井駅南口 宮地楽器前 12時
場所 滄浪泉園とはげの道
句会 午後2時～5時半(萌え木ホール)
(詳細は別紙ご案内を参照してください)

★会員の現況(3月末現在)

2339名(正会員1955名・一般会員44名)
☆新入会員 1名(敬称略) *印は正会員
*南行ひかる(国分寺市)
(昨年度10月以降、多摩地区に転入された方)
*山岸 由佳(小平市)
*藤井 遙(日野市) *中嶋 憲武(小平市)
◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(申し込み手続き不要)。それ以外の方は年会費2千円です。お問合せ・ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

関 梓(梓) 満田 光生(光)
飛永百合子(百) 山崎せつ子(せ)
永井 潮(潮)

◇◇◇◇◇ ご案内 ◇◇◇◇◇

俳句研究会

第5回 5月28日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)

第6回 6月25日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

*講話 前田 弘氏

第7回 7月23日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

*講話 市川春蘭氏

*講話 未定

(いずれも会費五百円、出句三句)

○感染防止を心掛け、体調不良(発熱等)の場合は積極的にお休みください。お出かけ前の検温とマスクの着用をお願いします。

〈在宅句会〉(投句参加)

▽開催日の一週間前までに投句してください。

▽出句は一人三句です。(選句はありません)

▽20×3cm程の短冊に一句ずつ書いてください。

▽参加費は千円です。(出句時にお送りください)

▽句会終了後、全作品の得点入り清記用紙と高点句、出句された作品の成績、寸評等を取り

ポイントとしてお送りします。

ポर्टとしてお送りします。

(投句先) 〒180-0006

武蔵野市中町3-29-19

蓮見 徳郎方「俳句研究会」投句係宛

編集後記

☆新型コロナウイルスの他に私的な事情もあり句会から離れていました。五ヶ月ぶりに参加した対面句会が新鮮な一日でした。(梓)
☆五年間の再雇用期間が終了して本当に退職。教師業が好きなのを改めて自覚した。数ヶ月充電の上、非常勤での教壇復帰を目指したい。(光)
☆三月二十日に東京では桜の開花宣言があった。一方遠い国では悲惨な戦争が続いている。一日も早く平和が来るのを祈るばかりである。(百)
☆梅、辛夷、木蓮と花が咲き春を謳歌しています。人間は出かけることができず、イライラしています。研究会でお会いできること切に。(せ)
☆前号で新加入の中矢温さんは東京外国語大学の学生さんで、昨年石田波郷新人賞奨励賞を受賞した方。あけぼの集のお誘いに快く応じられ、便りにコメントも頂いた。会員の高齢化が進む中で若い人の加入はとりわけ心強く嬉しい。(潮)
―題字は三橋敏雄氏―

令和四年四月二十八日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井 潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-10-7

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

FAX 0422-3301-0934

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 0422-6202-6262